白き盆。挑灯。切子燈籠廢れ彩色の草花を畫る挑灯行はる、

提燈産地

〔毛吹草三〕山城　燈挑

〔新編相模國風土記稿二十四足柄下郡〕小田原宿○中略　新宿町○中略

土産提燈　俗ニ小田原挑灯ト稱スルモノ是ナリ、古ヘ當町ニ住ル甚左衞門ナルモノ、關本最乘寺山中ノ木材ヲモテ始テ製ス、靈山ノ木ナル故ニヤ、深夜狐媚天怪ノ厄ヲ免ルヽ由傳說シテ世ニ弘リ、享保ノ頃ヨリ、專ラ諸國ニ通用セリ、甚左衞門ガ家ハ斷タレド、其親屬當町ニ一戸、萬町ニ一戸アリテ、今ニ是ヲ製造スルヲ家業トナセリ、町々毎塵ニテ鬻グトイヘド、製造ハ彼二戸ニ限レリト云、

提燈用法

〔三好筑前守義長朝臣亭江御成之記〕一三月○永祿四年卅日、末刻御成、○足利義輝、中略、

一御門ニちやうちん二かけて置之、御門役ニ渡之、

〔太閤記二〕因幡國取鳥落城之事

大將陣の太鼓、櫓々の小太鼓、一度に打出いとかまびすし、夜々の廻番、數々の挑灯松明、行かふ光のかげ明かなれば、城中○取鳥もしやの便も賴みなく、藝州の傳も中々思ひ切てぞ有にける、

〔太閤記十二〕小田原籠城之事

晝夜の廻番かず〳〵にして、夜は挑灯の光鐵炮の火に、五月やみも名のみにて、城中の上下これかれのすさまじさに、身はうつ蟬のやうになりはて、人ごゝちかすかなり、

〔當世武野俗談〕新吉原松葉屋瀨川

正德の頃とかや、江戸町茗荷やの奥州が提灯の文字、貞淸美婦胎と云五文字の裏に、假名にてれんいつはりなしと書て、中の町へ持せ道中せしどなり、

〔憲敎類典五之十五下江戸町觸〕元文二巳年閏十一月